



北越奇談

ル 4
4231
1



4231
卷 1

花植その園その魚その蜂そののしるふその山その火その渡その

池その夜その照そのるそのしそのるそのみその水そのをその葉そのひそのてその

予その書そのをその讀そのむその終その日その傳そのをそのなそのにその書その肆そののその詩そのことその

屢その之その一その日その小その舟その幸その之その人その者その江その一その族そのをその携そのりその

まそのろそのつその標その頭そのとその北その越その奇その談そのとその予その朗その誦そののその詩そのことその

曰その夫その幕そのとそのしそのしそののその他その乃その國その名その勝その言その強そのなりその

其そのことそのをその守そのりそのてその文そのありそのてその其そののその書そのありその

早稲田 大學 図書館
昭和 30.1.18 契
藏 書

宛然として北越尔はうごとく書連に上峰
かゝるや書肆笑ていふ我既其心ゆれと遊
編者崑崙先生々遙よ北越三条にあり
削刷ゆつてのち先生に校合を待む發兌の
期を錯るゝ子に其度と語らん為来れり
とて去書肆に言黙止がゆく備書刷人の徳
を補ふとて我唯倍書り遊ぶるが事

書を校合ふとまき本をくひを先生に
悖こととて校合ふとまきは稿本を
めらゆとて先生に及んば
校販のまきとまきとあは

文化八年辛未蘭秋

柳亭主人種彦



北越奇談目錄

越後地理路程畧圖 並順路案内

龍蛇奇

卷一

七奇辨

卷二

玉石

卷三

怪談

卷四

同

卷五

人物

卷六

右前編六冊

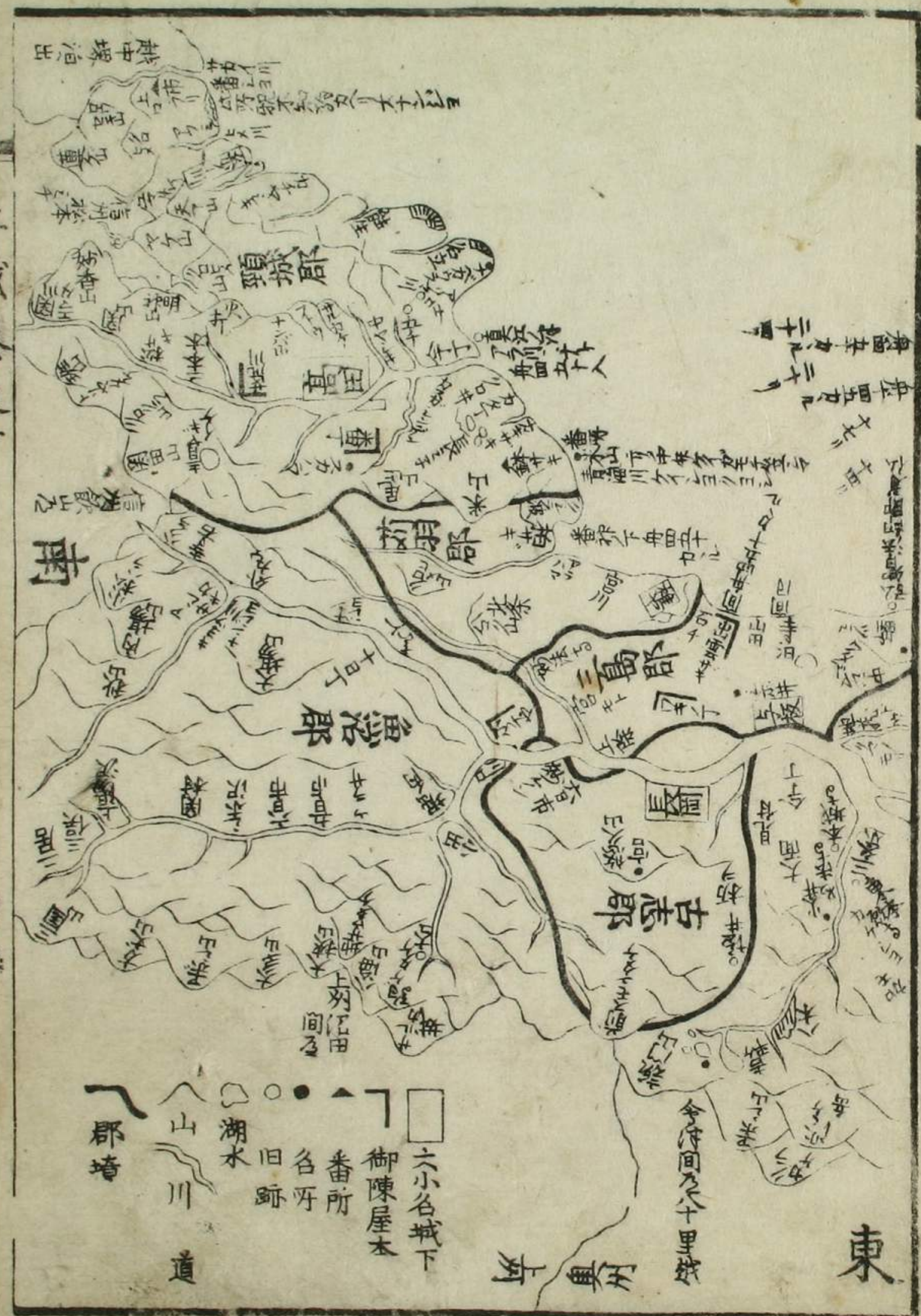
北越奇談敘

維昔吾北越國倍相傳為口實者有七奇談焉爾後民間妄好怪僻雷同其說塗之增附暨今至其既有二十有四奇事云於是乎愚者動眩惑于其偽妄瞞無適從矣吾橘先生詳論辨七奇輯錄其說撰題北越奇談者若于卷博而約簡而要天下始知七奇之說且許其實也昔司馬遷將為史記歷觀天下紀載亦勤矣故及書成人服其談博也先生

越後國界圖 南北八十一里余 東西自十里三十六里止

頸城郡 千六百六十四邑
 新井郡 二百九十一
 三島郡 二百五十七
 魚沼郡 七百八十一
 古志郡 二百五十六
 蒲原郡 一千五百七十八
 岩船郡 二百三十八

南北十八里東西 佐渡 自一里至七里



□ 大小名城下
 御陳屋本
 ▲ 番所
 ● 名所
 ○ 旧跡
 湖 水
 山 川
 道
 郡 境

越後國界圖

八

入方村 ひびきをきかす 東本願寺掛あり
如法寺村 三系二十丁 三系 東本願寺掛あり
○三系 東本願寺掛あり 東本願寺掛あり
○三系 東本願寺掛あり 東本願寺掛あり

○角田濱 絶景あり一丁のまわり 新浮 一丁は景色よし
○角田濱 絶景あり一丁のまわり 新浮 一丁は景色よし
○角田濱 絶景あり一丁のまわり 新浮 一丁は景色よし

○小島 八房梅 草水 油の涌地あり 河内谷 陽明寺七奇一
○小島 八房梅 草水 油の涌地あり 河内谷 陽明寺七奇一
○小島 八房梅 草水 油の涌地あり 河内谷 陽明寺七奇一

○水原 福高波のわたりを通り三丁 新發田 津口候五万石市城下せいらりの
○水原 福高波のわたりを通り三丁 新發田 津口候五万石市城下せいらりの
○水原 福高波のわたりを通り三丁 新發田 津口候五万石市城下せいらりの

○乙村 大田堂 村上 内膳候市城下 蒲葡萄峠 葡萄の産地
○乙村 大田堂 村上 内膳候市城下 蒲葡萄峠 葡萄の産地
○乙村 大田堂 村上 内膳候市城下 蒲葡萄峠 葡萄の産地

○右大路道路少の遅速ありと云ども皆傾路なり
前の圖とひきあらせらるるべし

凡例

一 怪談の君子の情む所なりと云ども近世の風俗文事なるをさるるんべし
聖詔の已に童牧の口號より仏説のよきより婦女の古妻と云れりあり
わけて朋友の茶話對實乃冷笑動と云れ其類をまがへんと云々嗚呼我
等乃下愚然して退く小無中と云れむかの怪談妄説と時ありと云
又一助あることありんやと云々予は戯作と云へりといふれ素意あり読
人の中へいれしむふふふふふ
一 奇事怪説への記家への論をの序數十百章に至れば予が月此の
月此の序の金十はと二三取て三寫れあやまの無に色あつて
一年歴日時とありと云々人乃姓名をわくせらるる赤地名をよむ

葛師北齋圖



北越卷之一

四六

北越雪中之中圖



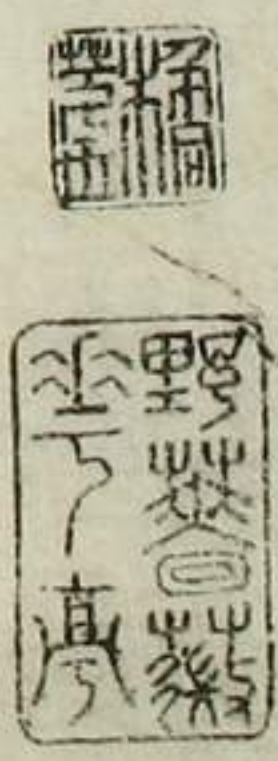
北越卷之一

其入を記せるをわり是は今時存命乃久又旧事と云ふと其子孫顯然する
いふれを憚るもの

一 事と云就はと云は予が乳字性愚乃りて予亦國字天尔遠波の相違尋
るべく希くは特達乃諸子言々に唯黄を加ふるんを請ふる也

文化八年辛未仲秋

北越三条 崑崙橋茂世述



画北奇翁乃筆かれと画翁の盤多をよまはんと崑崙子のと云繪乃
まに取ももれ四板かたりに茂世の印をわたり印なり
悉く北奇翁乃画なり

辛未秋

柳亭梓青再稟

北越奇談卷之一

北越 崑崙橋茂世述
東都 柳亭種彦校合

龍蛇ノ奇

北越ハ水國なり西北海廣く東南坤に隈あり山勢波濤
のよく聳て其央只香山并岳を置のこけりて余地をく
平田邑里離坎八十余里に連り横幅亦地の厚薄に従ぐ
或ハ十或ハ二十乃至三十余里止て川脈縱横し池伏星
流津港水の大方りの鎧湖と名づく回リ十有余里四時文
に瀾漫する商客つねに揚帆して來往と蚌珠照暗と南溪

か東遊記のわづらひりて畧之福湖次々、圓り九里のわづら
冬夏水尚不増減蓮花如錦魚舟織かむ、謂ゆる青蓮の
生むり所なり塩津深きとて、頃只一片の砂岸と穿つて
教皇の酒水一時に帰海、今已に六十余村あり佐浮ハ山向
にありて其境狭けれど水甚清麗にして大鮓魚を生む
大字田浮九浮蓮浮浦浮徳人浮揚枝浮岩関浮岩松浮
沼畜浮鳥屋野浮園淨寺の浮總て蒲原郡に多くありて
鱧魚の美なり、秋風に感をさし、蓴菜の冬塩ハ己よ友人の
好對に入る長峯の古城跡とめぐる、湖水二のわづら其清徹
のわづらあり、雲に鯉魚鱖と産して北圓のわづら又此しき野

頸城郡の中長地青柳の池あり山の半にして清冷明徹、
つらなる、伏せり、と謂ゆる、階龍あり、くもとて、人語を
さくも、わづら忽水涌浪、くもとて、近付べし、とて、一変あり、その志
怖む、とて、くも、上出の池、鏡ヶ池、蒲生ヶ池、皆次之、又五十嵐
川の原流、蕨門山の中嶺、一、謙門ヶ嶽、吉ヶ平とて、野セリ、乃
池あり、其丈、くも、の馬追ヶ池と稱む、古本、齋々、と覆ひ山
間に、透りて、清徹鏡の、とて、くも、一点の、莖織、かむ、人寒慄、とて、
の、異郷の、客到、とて、即雲、犯、凡、とて、雷雨、とて、此、山底
白螺を生じて、一奇、とて、四、中、早、とて、時、ハ、行者、とて、くも、は、山、に
登り、かの、白螺、とて、くも、の、即、丈、雨、も、田、間、山、を、り、て、後、速、と

其河にわたり返るとりなり若誤て螺死とるこまは流にあり
 とぞ大池鱒之池河高之池亦人皆次之河山なるに應信川其
 源甲飛信の三州より出く即千曲川あり魚沼川一之野川
 とてりり方山の諸流もく是に合誠に千里の長流と云べ
 春秋冬夏のつづくう森隈兩岸を侵せり其幅亦より
 て校岡へのれども木板より三条の間にさるて千数百回に
 ともさる所教里よりそれより三川よりれく浸らるるを
 新深より沼等の裏酒漕一里のありて水涯と云を海漫
 海潮に入舎とも呼るり是より呵水にさるる通船の新渠
 り二里の間茶店お達る阿賀川と云る其源日光山より

出く奥州を歴今津山中の流ひとらにあらまて信川に
 井くぬ文江なり海をさるるなりて松ヶ崎にけりる所千二百
 間と云塚川姫川へ國の南のありて至双の急流より青海川
 布川古川股川大和川早川荒川保倉川近江川鶴川粟田
 川朝目川小谷川東川島傍川三島川宮本川清津川赤川
 中津川大野川佐梨川阿古百川大川刈谷田川貝喰川
 五十嵐川天神川加茂川古阿賀早出川多野川加治川
 姫田川乙川黒川絶名川荒川清川濃波川大川亦なり其外
 分流浸流丈小の流水のげくさるる誠に北越へ天下を双
 の水國とるべからるかゆに龍蛇の化を尋にりて海より出く

山に入山より春づく湖山に入山伏巻き雲と起し不時の凡雨と
 きてて年ど人の見る所より早見する時より是を夢ていふ
 人どか葉公の龍と好める論に異なりども人のお訪るよ
 付く不審うらむどもおわりのしが去ル寛政五癸丑年十一月
 廿日さりがさき私用出来て独暮釜に寒風とあのみ新浮の
 津にいづらんともは日殊に雪をびくふりて行か人もあ
 ぶりが本坊する茶店にさき歩は形やあると尋ねおむるに
 かりふ一雨雪とあのみさふもあまき小舟ひらるる深きまうせ
 く漕舟のぬ待りけりてとひれば幸ひと便とりてり船中
 に簑うしちまきて坐るとおむる一忽阿賀の大江と横に

けり新渠のいづりて茶店を望むは日の凡雪とあのみ
 るどに春往の小船数十艘岸につらあまき行きに舟もまづく
 もあまきさうりけりて舟子の回族人今あまき寒気とあのみ
 移ひとく又一里をかり漕行ぬ時やうご七ッはらるるさうりども
 凡のいづりあまき雪空中にひるかや遠景徳て暮がさうり
 けり野ちが名をなす一りのありて新浮つの一里なり名にわ入
 八千余流の港湊とあり海と河氷と只一片の汝岸を隔つる
 のいづり浪天に漲るる人いとあまきおりうらるるさうり
 舟底に打卧し居けるに舟子忽声をあげあまき強きうら
 ともや龍巻の春あまきさうり舟底にまらひ卧しぬすもさうり



編者崑崙
新浮
龍卷

二少走卷二

二被繩引つゝ水面をふ吹放されたり残る九ツの舟は少
しも動ぜどゆるゆると岸にあり其疾くもはぬ舟子固く
舟底より走のり野が刺に漕ぐをふる美の命を全
しかの咎を宿待て入るれが先きて十一人の舟子皆
をこに死因とお願摩たぬどぐとて一づ坐をゆづ
予と介抱ゆるせぬ其疾にぐるぐる一同に家内六人の客
三人より各枕を打交て臥とくと予はかるとのゆも
ぶるに寒風肌を穿つて夢むもべし際もく打咳けれ
はあつゝ孫笑止いやわひけん故て起より外面に出果松
尋ぐお承りて床下に委左右にもと其申の枕とす

上にも厚く有覆ひけしへ忽を吹りて暖つるそいへ
かの錦繡の衣のものいもやろわくしとあそそは
世乃生涯いんわる奇りゆふものひゆるりのる
凡此越海をこの人家に上屋上の隙を立田間に龍巻乃
節必も百蛇大勢あつまりもよの激濁るんどうりも
其怪凡そのれ造るこが

聞龍

寛政三辛酉年八月朔日信川の西江戸巻の傍に
池水ありあつるに日忽西北の風をげく吹来りて一点の
その水面に落るとんくが百雷一度に裏き起り黒雲田野に

ちまき二の龍火水上に戦ひ東に追ひ北に返しく回轉せらる
 凡車のごく震電四方よりひらめきその箒地軸を動けけるが
 忽怪凡左右に吹るれ暴雨盆をかこけ其疾を百千の速
 督を放つがごとく一奉のふととさるる氷塊をまじ一巻は
 ちり者ら皮肉を破り骨をくぐり烈風のさる野家を傾け
 と穿ら石伐付く土を覆と急雨のさる野登と通し戸を倒
 平地忽江河をうせり一龍の赤伏さるる穉麻をらま
 村屋を乱しく栗林とく村下をさる加茂の山を添へ
 宅の一龍へ信川とよりの三条の町端ととど堤の上なる土
 と押茶店を倒し南とさるて巻去りしが又半空より引返しく

山の方を北に逃り行くも至る所伏あつて息をきり
 村落田野大小を人草草木に害ふまゝめし殊に甚
 信川の多し栗林の前後にて其餘二三里のさるる
 のわり予は此の地端にありて其日六殊に八朔のさる
 田家に親宴しゆりけるに翌日早天加茂の近村
 へり巻御到来を其変る所折ひ役所より見合てかゝる
 龍の大變は北越にも稀なり

巻水

八月十三日朝吾時新浮と出船しく池端の幽荘に
 人々と付人者一人乗せられ後舟一丁ぶかり下りき春のぬ

予が乗合の湯殿山浦尾州の乃者十八人なり殊に晴天一片
 の雲なく風もなほくふ黒色つゝなかりはし淡くお難るく打後り
 浪考の裏深より新渠一里をり舟子の深もひらせて急ぎ
 けるが忽海上上下ひれの雲起り瞬の中は半天に掩ひ数條
 の雲安下り已には上五六回にもなりぬとせゆる以ちまきりふ
 中尾時が忽白波さく湧上りき尾に接るとかすーが一條の
 白氣黒雲の中はまのわると数才丈なり巻あげしる水も
 半より断く落ぬ海上の波浪はまきく窪らなる穴をなせり
 がとて白氣雲の中は入るとひとく驟雨滝を待つるがとて
 船の向もなほくふと船中忽おふれをせり 藁をこぼり

からける所へ文のまゝ御晴むぐて後なる舟のつらに舟人者
 どもりこころしく顧省むとふるもさう出来りたづ人にせぬ
 と措れがらうふ後々舟の一点のあまのつらさごと舟人
 空の巻とどくひりしとまんりい不思議なる龍の神変計り
 がとてとどまりりすおひ月とどめて龍の水は巻くといつる
 見つるが是を以考るに世に龍の水は巻くといつるは
 のねどまらん水中の巻きとよび水を曳く上天とると是
 たりは日遠方より見ゆる人のお流るは十二條のき身下り
 ともるとつらされども近く是を曳く雲数條の中只一條の
 文をば上に近付切の時どる時忽水中より浪りき海底裏



聖敬寺乃園中
小蛇風雨を
記して
登天を

けりて一條の白蛇と突て登るちれば十三條安下り
 するもく十丈の水を巻けりあつて水中の龍とがわ
 りてはしなむゆりて引連教條のまはあはるるを
 してりまを一点のまをいびく後也の化をうま
 の龍水成ゆるる前もまづいしてゆまにりなす又乃
 説紛マ追て知者の論成せん

登蛇

頸城郡松の山村聖教寺とくく森とくく古木昼暗く
 庫裏へ丈尺に臨き清水潭とく夜鳴るるあり一木
 も老僧客とお對し同語止くまづく黙坐するあり

尺のまより小蛇の長五六寸まづくまづく這出く石上の登り
 其尾をばい四五寸ばかり石に付け直まき一声をそく吟
 ぶ客わやう同俗の曰是ハ正しく登天の蛇なるべし由
 此まづくまづく人ともびりぢぢと納り窓をせ糸に
 白雲ひさるる中一の奇雲答頭にありり小蛇忽ち
 りんごのうらぶとまづく暴風とまづく吹起り樹を
 折し山を動く蚊龍雲中の現れ西の表東の地北に龍り
 南にかけやて横横とまづく數十丈大雨いよくつく石は穿
 ら山を割く洪水にあり暗まきと闇夜にまづくおの
 立たり暮の七にまづく戸を開く開くまづくおの

天傾き地陥く、かそけしきどびふかりは去るに忽ち中
一声の響ありて山林動揺けるが風雨程なく晴けりて
行くともさき其去りし所とあらざりしに三ノヤをどるて
初更の以本と刈者深山に入大蛇枯骨数ありて成りて
つり予を接ぎるに登天の龍人の着に觸るると天を
おれと罰とくつりり三ノホのしるるあつらん只は説
も又信どぶまんのあつらむ

其二

三條の古城跡今も残さるるの内に堀いと垣れとさきこと
泥塗く水はくくつらつと開く長く人衆連生すこと

おやかれ声のそと爰に菊納くつらつと又むかりなる大蛇
一口のつらむ出かの芦よ登りつ其尾をり少くかれき乃
先きに打まると頭さく仰では成用まてえと豆やどるるを
吐けるが忽ち鞠のどきく怪雲とわりのかの小蛇をかぐ煙の
うらや中夜にま登る程こそめれ大雲俄にうづまると紀暴風
雨上を押し大雨のひつら暮るもさういかにさざりしがあ乃
登蛇のころうの北とさうて表きりぬとそへれど夜に入ると
うらや雷電のつらつとあつら二日のうらや大風雨止りけり凡そ
の類とるこ甚ましく皆月のあつら人の見る所はくくさうさ
疑へばいむのねとむ予のつらつと登蛇と見え



西川乃土人
倅をりく
怪物と
うんまふせ

似類

信川の分流西川とて入る海に近く伊夜日子山の一里東と
 里新ぼ乃南平岳はく舎と川つゞきの昔根と入る
 又鈴本村とて入るは西村川を挿てあり夏の夕暮若者ども
 夢くめつまう流れ浴砂打に敷れぬそよおふくゆたふ
 二尺あまうるものゆ中一丈をかり上にありてまきうり
 ひるむるも兵衛の持とつゝぐとく一時とに答あつてま
 又室むまきうもあつてとてあつて小児ホ釣竿山竹あんど
 来つてとを打んととれぬも又の打あつてとて若者ども
 奥に入らぬに柱お挿きんとて獲ひまらて左右前後も

打てども其ひるむるも連いして一口も打ひらとめさつて後
 次第に又勢東西の岸にあつて来り力と声とをいげは
 ておちぐにゆ時とて怪物ハ流る口と西村の老若ども
 ちとて發物とてちびとて旧も己の暮とるわどに凡る
 俄に山陽より起りそのまじと皮肉と破るかとて驚く
 して皆く家に逃げゆけけ一り殊に奇うう按ぶに是も
 も又登蛇のたがひやうんう

巻水一奇

中ノ口川とて入るも信川の分流にして西川とて入る其幅とて
 又うりは流に付く吉井村のわたり千野ぼくとて入る

潘濂のり尊菜羹かどよく生じ其村に多し其寡女在
 て其妻秋の邑をゆく業とせしは日小おの揮さす水
 面に漂ひけるが時天機の一絙の雲かの村中より浮乃上よ
 掩ひ下ア〜水と寒く〜晒せる布と引のぐるがどしき中
 の声のりておの樽と押の異あり〜家むん出〜まを成
 了れば空更一條の白氣希き尾を安かどく村のわす
 ろり深中まぐ十余丁のゆり〜所さく引〜入〜り〜りや
 妻とるる寡女定〜は龍にまうれ死せんふびんさよ〜と
 からに再〜ら〜ら〜けりや〜ふ忽黒き東の方けり去り
 びの〜ら〜凡おあ〜るも〜く〜何〜れ〜の〜と〜然るに五六里

雨と雨と人々て数十里の連が〜るさふ〜と〜と〜と
 野ま〜るど〜りの寡女舟さ〜と〜せ〜り〜り〜れ〜べ〜ん〜ぐ
 ゆ〜り〜り〜りのゆ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 けかの寡女〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 ぞ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

河伯

水中に〜河伯に安るれ死〜る者身毎にありて其説分明
 信川の〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 十八才〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り

〆が忽小底の引入く人どきどき大の驚きあつて露
 〆くまづりけつう考るゐどい村中の老若川岸のわらう細
 と突鍵とさげてさくおひれども其のさくはくさるる物も
 〆川下半里をかりのしと鐘が剛とつる野まいつう勇壯の
 若者五六人腰の縄を付ひひに鐘をひきりて小底をうり
 けるが鐘をうかの亡僧をいごさめあげて是を忍れが皮層の
 〆底付の野まいつうで肛門開き後ふく経満く是を推が
 〆ううぶめさううらや歌んは後中へのりと家もくくま
 まとい打むや切らむやうんと声ぐに奥やぐに其内叔又う
 〆人のつくく正しく毒地の後中へのりううぶく打むはうりも

〆のぬべきぞ肛門にはとん小カとさう後上うう突殺さんと人
 〆一尖をける野母うる者つう懸く借侶の身非常の死とくども
 〆身又ぬいぬんと業生を成你まに似うり只に葬やいぬと法
 〆のぬぞさうバ火葬にう歌もさり小焼殺せと大なる瓶に入
 〆石を蓋にして其上もさ火大石のう困り焚炭数十俵を以
 〆焼まうり小忽火火盛にまのり火勢近付づくもあつねが今
 〆蛇才も焼失ぬづく是ゆる野の忽火中一声の管ありて楯
 〆尖の中よりスガかりのりりの火中にもねのづくと人へ
 〆き丸四野のうら暴風又雨まやとらふづくもあつて山成
 〆せり火気忽消くせく是と忍れが瓶らけ石数片に

破^くき^り割^りく^り 謀^まに^と龍^{りゆう}蛇^だの^{しん}神^んを^ん人^{じん}者^{ちや}の^およ^ぶ野^のに^あら^ぶと^かる
人^{ひと}の^ひひ^をそ^れら^る

暖蛇

昔^{むかし}塚^{づか}へ^の福^{ふく}湖^この^西西^{にし}に^いく^く今^{いま}数^{かず}十^{じゅう}邑^いの^東東^{ひがし}に^いり^て福^{ふく}湖^こより^酒酒^{さけ}
水^{みづ}と^阿阿^あ水^{みづ}の中^{なか}へ^吐吐^つ流^{りゅう}す^る濁^{にご}川^{がわ}と^する^は狭^{せま}果^はの^りく^く其^{その}廣^{ひろ}さ^二十^{じゅう}
余^よ同^{どう}に^いる^べけ^きと^深深^{ふか}ま^り幾^{いく}な^ると^はち^ちり^りど^ど町^{まち}の^端端^{はた}
大^{おほ}曲^{まが}と^する^は冽^{れつ}殊^{じゆ}に^涼涼^{すず}け^け野^の冬^{ふゆ}の^半半^{なみ}より^夾夾^さに^まり^て白^{しろ}魚^{いそ}を^と
と^する^は夜^よを^ひみ^ひと^じと^れど^も漁^り者^{しや}三^{さん}網^{あみ}より^ここ^こ又^{また}度^{たび}
と^のあ^らぶ^ど四^よ度^どに^至至^{いた}る^者者^{もの}へ^即即^す水^{みづ}底^{そこ}より^其其^{その}網^{あみ}を^引引^ひき^てく^く
破^くり^もら^す予^よも^け地^ちに^入入^いり^て富^{とみ}く^く月^{つき}夜^よ積^つ頭^{あたま}に^是是^{こゝ}を^入入^いり^て又^{また}

十^{じゅう}と^せど^もか^り以前^{いぜん}より^人人^{ひと}珠^{たま}に^随随^{ずい}ち^ちなり^て月^{つき}川^{がわ}水^{みづ}散^{さん}に^逆逆^{さか}ま^り
記^かり^て左^{ひだり}右^{みぎ}の^境境^{さかい}に^あら^はれ^て漁^り舟^{ふね}を^覆覆^{おほ}ひ^て網^{あみ}を^破破^くり^流流^{なが}れ^て一^{いつ}里^り
の^まり^り下^{くだ}り^が忽^{たち}水^{みづ}底^{そこ}に^沈沈^{しず}み^て止^{とど}ぬ^る其^{その}通^{とほ}り^筋筋^{すぢ}西^{にし}堤^{つゝみ}の^村村^{むら}
農^{のう}父^ふ漁^り人^{ひと}掉^{つり}を^とと^て池^{いけ}を^まが^て逃^{にげ}れ^りし^がこ^こに^一一^{ひと}と^{して}
其^{その}形^{かたち}の^まり^りの^とと^して^は又^{また}福^{ふく}湖^こ東^{ひがし}南^{みなみ}の^岸岸^べ新^{しん}田^{でん}と^す
つ^つ野^のに^は某^{たれ}と^もく^くゆ^ゆに^富富^{とみ}る^農農^{のう}家^かの^り其^{その}下^{した}男^{おとこ}馬^{うま}乃^なま^ま
つ^つ新^{しん}次^じも^も昔^{むかし}昔^{むかし}に^比比^ひし^て成^なる^る網^{あみ}に^臨臨^{りん}み^て釣^つを^とれ^ば時^{とき}か^り
休^{やす}み^のひ^もが^忽忽^{たち}水^{みづ}底^{そこ}より^二二^{ふた}丈^{たけ}か^りり^る暖^{ぬる}蛇^だを^頭頭^{あたま}と^{して}
出^でら^れる^のは^は成^なり^て用^{もち}き^ける^まぶ^かの^男男^{おとこ}の^あら^はり^に打^{うち}た^るま^ま竿^{さか}子^こ
ま^まと^て養^{やしや}と^志志^しれ^ば要^い路^ろを^とと^りて^は公^{こう}地^ちに^く逃^{にげ}れ^りけ^るま^まと^り

数十日病臥ぬけ以て予も其家にありてありて居るに於て予も
のまろにちそろくくして鱗鱗へ足定もせむと凡角のなるりすと
なり

龍種石

関の奥尾嶽に滝谷明神あり社前に形如卵丈六尺の石あり
なるまほにて固は殊に常ありざる石あり祭りの必
近村の少年多く集りて力を競ひあはせしむるに
十人にしりくさるに初し勝むるにそのまほなるに
十月の比まろ一日雷雨暴風ありて大木と引ぬき石壁
と崩れ一條の石を龍種石とて下りてかの社前の石状巻地あり

方に巻さるりしがまほなるに初し勝むるにそのまほなるに
又おま年秋九月も例風ありておまなるに初し勝むるに
五六丁巻さるりしが其山下に修善寺とてなる院のうら
に落しより其善山を初し又雨水も内にあふまほなるに
かむら平地一尺の水ありぬ寺傍に始り村中の者どもあり
のつらり来りて巻をみるに其前河中に落しなる石あり然む
は石龍神のおしむ所とて巻をみるに其前河中に落しなる石あり然む
巻を待に似たりたりにけし石人力のまほなるに
のまほなるにせんといふまほなるに和尚の曰はるに定む龍種石
へ只打碎て捨るにまろくと石工をよびて是を切しむ工人即ち

石脈とくし油とく矢とく入るおと入る終日色と打ども
 破きどお五日数十人と催して打まじりいん忽金石乃くさる
 箸ありて西断と其央少き空所ありて小蛇四り春蟻まじり
 さればとく色をも打殺さんとも和和尚又急に割く後
 流にまてし又五華山の中岩出湯の奥に断岸数十丈の
 表あり其上の龍の劔塚とくものこ四ヶ所ありある
 数丈一壁の丈石小くく人の乃く牙にありて古よりあり
 て龍の牙にくく形自然とく
 茶臼のどしつらありて龍の口とく
 是も即龍後石のくひうんう總ては近村ひざり

とらとく百丈大勢其炭のわたり登り小石はんとく其
 劔塚に掘くく下る所忽とく一掘くくふる
 く掘ひまりぬ珊瑚水仙子有一圓石如卵一日風雨
 石忽破く虫出即吞硯中水雲上去トアリ此類るべし

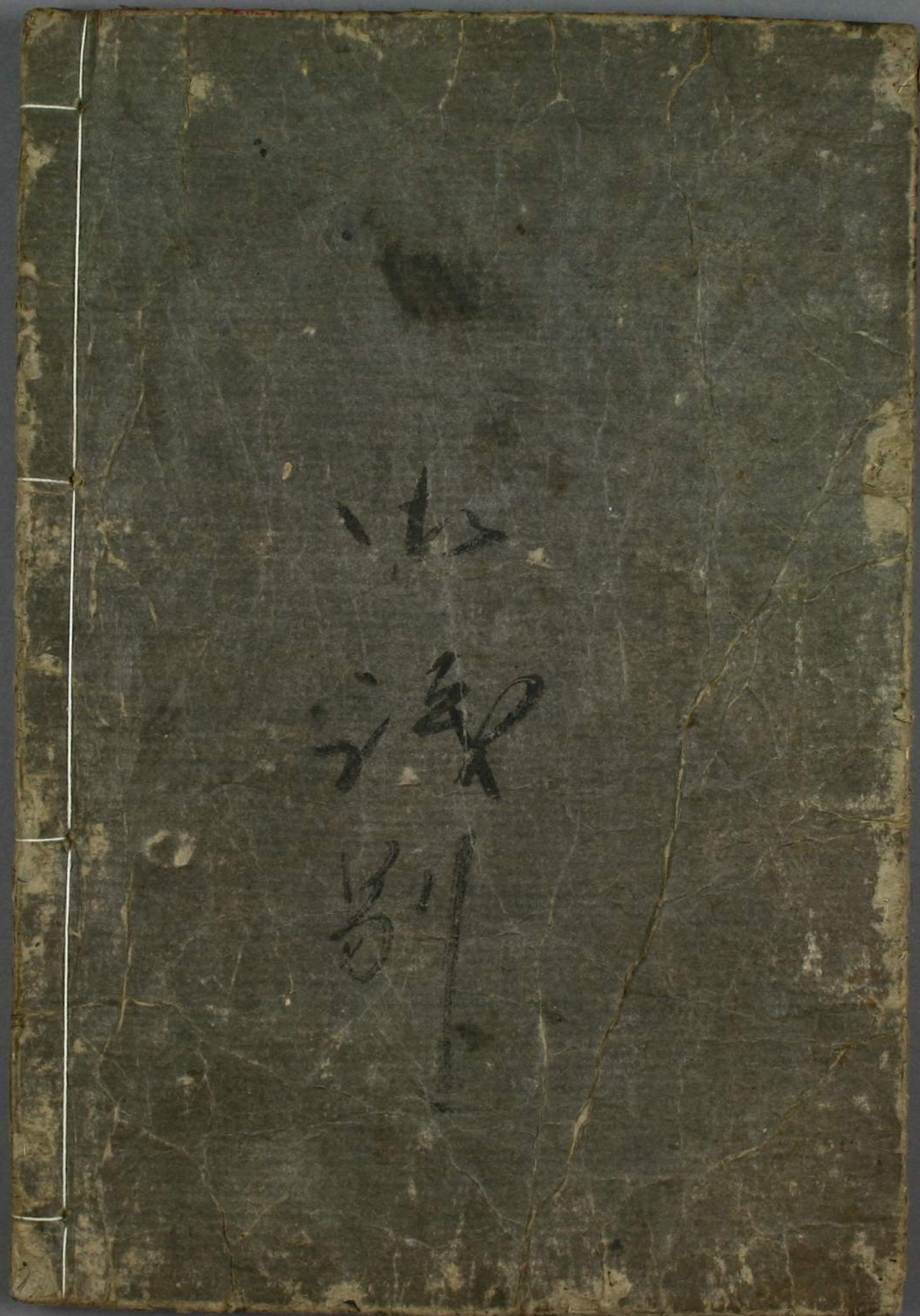
龍力

文化二丙寅六月廿七日未上刻時天俄に一輪の雲起く
 又凡張る白日忽周夜のくく日北圓の松木穀八
 百石伐つて為刃の沖とく怪乎常うく凡裏
 帆を吹ちたり舟の進退自由うく船政揮ちく繩とく色
 凡とく切て沖の方へ流出さんともく忽四條の黒き舟

の前後に曳くらりて波次舟に湧きよれば船の老父大まに
 おとろき見へ正しく龍巻の代所へくらりたるもぐり只は逃
 るるにせむとて俄に早舟一艘引けり九人の者ども
 つまきまふらつるもよりの櫓を推す者十丁ばかりもるるに
 四條の黒雲を打捨てる舟の前後にうづまぐりおどろきおま
 浪さく湧あがり怪風旋るる船伏巻ておまら四五おまあり
 も安のげまよぬに落しけしおまらに割砕けく水
 底へつるとおまら百雷の落るるに答りて龍の南をさ
 ておまらぬ九人の舟者おと浦にほぎ近付ければ浦
 くくのくくくく漁舟にうらまらひまらりてててててて

ぬは日遠く見と望しつら五條の黒雲海上に下りつり
 するが時ぶかりの同いなる本の葉と表せく女春りぬ
 されども龍の海をに沸くくくくくくくくくくくくくくくく
 人家を巻上り行人と引ま敷十丁おまらしつり
 の漢にひくくも大船伏倒せしつり後て北越夏の夕陽る
 まらとまら山魚水睡なんるとおまら下る龍の江河池水松
 巻る巻るつらつら然れども海潮を巻る巻るとも雨に塩
 の丸味もまも奇なり只龍の神変一滴の水をもらて
 とつらつら其奇可知

北越奇談巻之一終



山海經